

Title	個人主義的言語観の検討 : チョムスキーのクリプキ批判をめぐって
Author(s)	大石, 敏広
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 32 P.27-P.40
Issue Date	1998-12
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/5994">http://hdl.handle.net/11094/5994</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 個人主義的言語観の検討

— チョムスキークリプキ批判をめぐって —

大石敏広

## 一 序

言語は個人的な事実であり、言語使用者達の共同体はその現象において決定的な役割を何ら果たしてはいない——言語の個人主義的解釈とはこのような立場である。<sup>①</sup> ソール・A・クリプキはワイトゲンシュタインの考えとして、個人主義的言語観に対する共同体的見解を積極的に示してみせた。<sup>②</sup> クリプキの解釈によれば、言語の規則に従うということは、言語行為者個人において成立する事実ではなく、共同体という枠組みとの関係においてはじめて規定可能なものである。

これに対してN・チョムスキーは、生成文法に対するあらゆる批判の中でこのクリプキの議論がもっとも興味深いものであるという評価を下して、言語の個人主義的立場からの反批判を行っている。本論は、このチョムスキーによるクリプキ批判の検討を介した、個人主義的言語観の妥当性に関する一試論である。それは同時に、クリプキ

の共同体説の可能性を模索することでもある。

## 二 社会から隔絶された人の言語

言語が個人的な現象かどうかという点が問題とされるときによく引き合いに出されるのが、ロビンソン・クルーソーの話である。A・J・エヤーは、このクルーソーの話に言及しながらワイトゲンシュタインの「私的言語論」に反論したが、エヤーの議論ではクルーソーはまだ言葉も話せない幼児の時に孤島に捨てられたことになっている（A・クルーソーとしておく）<sup>③</sup>。だが周知のように、もともとのデフォーの小説では、クルーソーは船の難破によって無人島に漂着し、その孤島でたった一人の生活を送っているという内容になっている（B・クルーソーとする）。チョムスキーもクルーソーの例を引き合いに出している。チョムスキーはクルーソーがどちらの境遇のもとにあるかはつきりと述べてはいないが、彼の議論の論点はエヤーのクルーソーの方であるように思われる。だが、どちらのクルーソーにしても、孤島にたった一人で生きているという点では同じである。

この問題に対して、クリプキが考えるワイトゲンシュタインはどう答えるのであろうか。一つの可能性は、どちらのクルーソーも孤島で言語活動をしてはいない、というものである。クリプキの以下の文章はその解釈を支持するかのようである。

もし人が一人だけ孤立した状態で考えられるならば、規則はそれを受け入れる人を導くものであるという考えは、何ら実質的な内容をもたない。<sup>④</sup>

もし我々が視野を拡大して、規則に従う人を一人だけ孤立した状態で考えるのをやめ、彼を広く共同体と相互作用しているものとして考察するようにすれば、事態は非常に異なってくる。その場合は他人がその人に、正しく規則に従っている、あるいは間違った規則の従い方をしているということを帰すための正当化条件をもつことになろう。<sup>⑤</sup>

ところが、クリプキは、自己の議論が、共同体から隔離されて生活しているクルーソーから規則遵守という行為を取り上げてしまうことになるのかどうかという問題に対する答えとして、次のような注目すべき発言もしているのである。

私はそうは思わない。そこから導かれるものは、もし我々がクルーソーを規則に従っていると考えるならば、我々は彼を我々の共同体に受け入れ、規則に従っているということについての我々の規準を彼に適用しているのである、ということである。「規則に従っているということについての」私的モデルが誤りであるということは、物理的に共同体から切り離された個人については規則に従っていると言うことができないうことを意味する必要はない。それが意味することはむしろ、(物理的に共同体から切り離されていようと、いまいと)共同体から切り離されて考えられた個人については規則に従っていると言うことができないうことなのである。<sup>⑥</sup>

(a) B・クルーソーが離島に漂着したとたんに言語使用の能力を失うというのは何とも奇妙な話である。彼は依然とし

てその離島でも、自己が生まれ育った国の言語をそのまま使っていると考えるのが自然であろう。引用(a)においても、言語共同体の人たちとあらゆる物理的接触が断たれているという条件が、クルーソーから言語を奪ってしまうというわけではないと指摘されている。我々は、B・クルーソーが孤島で依然として、彼の母国語（便宜上日本語としておく）を話す他の人たちと一致した言語反応をしながら、母国語の規則に従っていると考えることができる。その際我々は、同じ母国語を話しているという視点から、「規則に従っている」という我々の規準を彼に適用しているのであり、その意味で彼を我々の共同体の一員とみなしているのである。ではA・クルーソーについてはどうであろうか。もしA・クルーソーが我々の言語規則と同じ言語規則に従っているなら、事情はB・クルーソーの場合と同様であり、そこには何の問題もないであろう。しかし、A・クルーソーが我々の使っている言語を習得しているとは考えにくい。A・クルーソーには言語などありえないという主張もありうる。うまく成人にまで成長できる可能性も極めて少ないように思われる。だが、幸運な条件がうまく重なって（例えば、狼に育てられるとか）、A・クルーソーが無事に生き延びて、成人に達したとする。その場合A・クルーソーが、我々の言語規則と同じ言語規則ではないが、極めて初歩的な言語規則に従っているという想定は全く不可能なのだろうか。私は、この可能性は排除できないのではないかと考えている。A・クルーソーの言語規則は、我々の言語規則と比べてあまりにも単純な構造をしてはいるが、とにかく一種の言語規則と呼べるものかもしれないのである。また、B・クルーソーにしても、その孤島では我々の言語規則とは異なった何らかの言語規則を作り出すかもしれない。

このあらゆる共同体から分離独立してクルーソー当人だけが従う言語規則というものの可能性は、クリプキのウィトゲンシュタイン解釈の枠内でいかに処理されるのであろうか。チョムスキーはこの点に着目する。もしこ

うしたクルーソーの言語の可能性が「共同体」に訴えることなく主張できるのであれば、チョムスキーにとって好都合である。それは、言語の成立と運営において「共同体」が本質的な役割を果たしていないということを意味するのであり、言語の個人主義的解釈が妥当であるということの証左となるであろう。

### 三 「共同体」の二つのレベルと「私的言語」

チョムスキーの言語理論では、言語の獲得は、精神の初期状態から最終状態への移行として理解される。人間精神は、言語能力の生得的な資質（普遍文法）を備えており、ある一定の経験を媒介にしてある特定の個別言語（英語や日本語といった）を獲得していく、と考えられているのである。この理論的枠組みをもとにチョムスキーは引用(a)の主張に対して次のような解釈を与えている。<sup>⑧</sup>

クリプキは「共同体」を二つのレベルに分けて考えている。まず、人間という種に固有な束縛としての「生活形式」を共有する人間たちの「共同体」である（「共同体①」としておく）。この意味での「生活形式」は、チョムスキーの言語理論の概念では、人類共通の遺伝的システムである普遍文法の段階である。次に、普遍文法に対して、後に獲得されたある特定の言語文法の段階にある「生活形式」を共有する人たちが成る「共同体」のレベルである（「共同体②」としておく）。我々はクルーソーを我々と同じ一人の人間とみなし、人間種に固有の行為を成すものと考ええる。「一人だけ孤立した状態で考える」とは、その人を我々と同じ一人の人間とは考えないということである。よって、クルーソーは、我々と同じ人間として「共同体①」の一員とみなされるのであり、その一般的な意味で「クルーソーは規則に従っている」という言明も可能なものとなってくる。

だがそれは同時に、クリプキの言語共同体説そのものを根底から揺るがすことにもなると言われる。クルーソーと我々は共に、「共同体①」を形成しているわけだが、「共同体②」という点ではクルーソーは我々の「共同体」の成員ではない。つまり、クルーソーが日常従っている言語規則は我々が日々従っている言語規則ではないのである。クルーソーがある言語規則をマスターするためにはその根底において生得的な文法構造が必要ではあるが、最終的にどのような言語規則が構成されるかはその後の彼の個人的な経験に左右されている。クルーソーは、我々を取り巻く環境とは異なる環境のもとに身を置き、その独特な経験を経て彼固有の言語規則の体系をいかなる「共同体」とも関わりなく構築していった、ということになる。このクルーソーの言語をチョムスキーは「私的言語」と呼んでいる。かくして、チョムスキーでは、クルーソーが最終的にある言語規則を習得し、それに従って行動しているということは、クルーソー個人の心理学的な事実なのであり、「言語使用者たちの共同体」というものへの言及は必要ではない、という結論になる。

さて、このチョムスキーのクリプキ批判は成功しているのだろうか。以下、三つの側面から検討していこう。

#### 四 クルーソーの言語は「私的言語」?

第一に、「共同体①」の役割に関連して。チョムスキーの議論ではクルーソーは、「共同体②」という視点から、彼独自の言語規則を創造し、それに従っているとされる。だがそう言われるのはあくまでもクルーソーが「共同体①」に所属しているということが根底となっているからであろう。つまり、クルーソーが《我々》と同じ人間であるという意味で、クルーソーの言語規則は根本的に「共同体」へとコミットしているということであろう。

これに対して、チョムスキーの側からはどのような反論がなされるのであろうか。例えば、クルーソーの「私的言語」は、普遍文法からのある種の質的転換によって成立したものであり、とにかく彼の言語は「私的言語」なのであるという反論はどうであろうか。これも妥当性を欠いていると言わざるをえない。チョムスキーに従えば、いくらそこに質的転換が生じていようと、人類に共通の生得的な精神の内的構造である普遍文法なしにはクルーソーは自分固有の言語規則を獲得できなかったはずであるから。

第二の論点は、言語の個人主義的解釈にとつて決定的な意味をもっていると思われる。注目しなければならないのは、チョムスキーの議論において「規則に従っている」といった表現がどのような文脈のもとに現われているか、という点である。

問題点は、クルーソーが我々の言語規則とは異なつた言語規則に従っているという可能性についてであつた。たとえばB・クルーソーは、自己の母国語を捨てて、別の言語規則を作り出すかもしれない。その別の言語規則は、母国語に若干の修正を加えたものかもしれないし、母国語をクルーソー独自の暗号に移し替えたものかもしれない。あるいは、もうすでに修正とは言えないくらいに母国語からかけ離れた言語規則なのかもしれない。その他様々な想定が可能である。また、A・クルーソーの言語規則について言えばすでに述べたように、彼の言語規則の構造は極めて単純であるとするのが妥当かもしれない。その単純さの度合いには幅があろう。また、彼の言語規則が我々の言語規則にどの程度近付いたものとなるかをあらかじめ確定することは困難であらう。

ところで、以上のような場面を想定する際に《我々》はいったい何をしているのであろうか。クルーソーの言語規則は《我々》の言語規則と異なっているとと言われる。だが、クルーソーの言語規則も《我々》の言語規則も共に



言語規則であることに違いはなからう。《我々》が両者を共に言語規則と呼んでいるということは、言語規則であるという点で両者は似通っていると《我々》がみなしているということである。つまり、クルーソーの言語規則は《我々》の言語規則そのものではないが、彼の言語規則もまた一種の言語規則であると《我々》は想定しているわけである。これは、《我々》が《我々》自身の言語規則に従っているのと同じように、《我々》はまたクルーソーの言語規則に従うことが可能であると《我々》が考えているということを意味している。たとえば《我々》は、クルーソーのいる孤島を発見して、彼と接触するに至るかもしれない。そこで様々なやり取りを通じて《我々》はクルーソーの言語規則を理解し、彼とのコミュニケーションに成功することになり、……等々。こうした事態を《我々》は前もって念頭に置いていられるとも言える。またチョムスキーが述べているように、もし《我々》がクルーソーと同じ状況を経験したならば、《我々》もまた彼と同じような規則遵守の行為をしていたかもしれない。<sup>9)</sup>以上のような《我々》という背景がなければ、そもそも《我々》は、クルーソーが孤島で彼の言語規則に従っていると想定することすらできなかつたはずである。

第三の論点は、クルーソーの言語が具体的にどんな言語なのかを特定する際の手続きに関わっている。この点については章を改めて論じていこう。

## 五 言語理論と規則遵守の事実

我々個人個人の事実として、ある語でもってあることを意味しているということを示すものは存在しない——これが、クリプキのワイトゲンシュタインが見出した懐疑論的命題であった。<sup>10)</sup>これに対応して、クリプキの議論には、

仮説の設定と事実の関係という点で意味の理論を経験理論と同等とみなす考えを否定している箇所がある。<sup>①</sup>そこでは、経験的科学理論の仮説は真に事実について言明している本物の仮説であり、意味について立てられる仮説はそうではない、と言われている。理由は次のとおりである。経験科学での例として電子についての二つの競合する仮説を想定してみる。この二つの仮説のうちのどちらを採用するかを決定する際に我々は、巨視的な対象の振舞いに対する電子の効果から得られる間接的証拠、ならびに仮説の単純性という観点に依存せざるをえない。というのも我々には、電子についての事実を直接に見る能力が欠けているからである。こうした能力をもつ全知全能の神などは、どちらか一方の仮説が真であるということを示す事実を直接に知覚できる。この神の比喻は、二つの競合する仮説は異なった事実を述べているということ的印象的に表現しているにすぎない。これに対して、意味論の競合する二つの仮説については、その一方ではなく他方を真とするような事実は存在しない。この場合、我々には、間接的な手段によってしか接近できず、直接的には知りえない事実の領域が残されているという主張は成立しない。たとえ全知全能の神であっても、二つの仮説の真偽を決定する事実を直接知覚することは不可能である。つまり、二つの仮説のうちどちらが正しい仮説なのかを示すいかなる事実も存在しないということなのである。

しかしクリプキの議論は、経験科学理論については實在論的立場を採用するが、意味理論に関してはその立場は採らないということをあらかじめ表明しているにすぎない。もし物理理論において實在論を認めることができるなら、どうして意味理論の場合にも實在論的見地に立てないのであろうか。さらに、そもそもクリプキが言うタイプの實在論を主張することは妥当かどうかという問題がある。たとえそうした實在論を拒否したとしても、意味の事実を認めるという立場は可能であろう（もちろん物理的事実に関しても同様である）。この点で、物理的事

実と並んで意味の事実を認めるといふ、物理論と言語理論の平行性を否定するクリプキの議論は説得的なものではない。このパラレル性を力説するチョムスキーの議論はある意味で正当なものである。

チョムスキーによれば、<sup>⑩</sup>個人に関する事実に基づいて当人がどんな規則に従っているのかが経験科学的に確定される。例えば、言語学者は経験科学者として、クルーソーが実際にどんな行動をし、いかなる判断を下しているのか等々のことを観察し、それらをクルーソーに関する経験的な証拠として蓄積していく。言語学者は、こうして得られた証拠に依拠しつつ、クルーソーの能力に関する「最良の理論 (Best theory)」の構築に努力していくのである。「最良の理論」に従えば、人間精神の初期状態は、言語の普遍文法や記憶のある種の機構などといった、人間という種に特徴的な要素を含んでいる。この仮説を土台に「最良の理論」は、精神の最終状態のある特定の言語を実現しているものとして説明する。もちろん、これまで「最良の理論」と考えられてきた言語理論が経験上間違っているかと証明されることがあるかもしれない。チョムスキーにとって言語理論は経験科学理論であるのだから、それは当然のことである。

我々が普段行っている言語使用の実態に着目すれば、懐疑論的テーゼの異様さは明らかである。ある人がある言葉であることを意味している、あるいはある言語の規則に従っているということが、その当人に関する事実として認められないという発言は全く正当性を欠いていると思えない。例えば我々は実際日常的に、「彼が『ビッグバン』という言葉の意味を知っているのは事実である」とか、「彼女が自動車教習所の教官の言葉どおりに車を運転したのは本当である」といった言い方をしているのである。もちろんその際に我々は、これらの文を、彼や彼女に関するものとして発話している。この延長線上にチョムスキーの議論も位置付けることができる。

だが、ここでまず確認しておかなければならないのは、チョムスキーの言語理論において、「規則に従っている」という事実がいかなる位置付けを与えられているのかという点である。これに対するチョムスキーの答えは簡単に言う<sup>13</sup>と次のようになる。我々は、言語行為者について我々が手にしている経験的証拠のすべてを処理し、当の言語使用者の行為に関して最も良い説明を提供する「最良の理論」を展開していく。その際、この「最良の理論」を構成する言明は言語行為者の事実について真理を述べていると仮定される。そこで、もし「最良の理論」がクルーソーの言語行為を説明するのに規則Rを援用するならば、我々は、その規則Rはクルーソーの言語行為を導いている、即ち「クルーソーは規則Rに従っている」と結論することになる。言い換えると、我々が「クルーソーは規則Rに従っている」と言えるのは、我々が構築してきた「最良の理論」の内部において規則Rが、クルーソーの言語行為を説明するための拠り所となっている限りにおいてである。チョムスキーでは、クルーソーは、内観といった意識作用によって規則Rを自覚し、その規則Rに則って行為をしているという規則遵守の構図は認められない。

では、この「最良の理論」はどのような身分をもっているのであろうか。そもそも、「最良の理論」という考え方は理論の複数性を含意していると言える。ここで、経験科学の原理的な問題である、「たとえどれほど多くの経験的データ（証拠）が集められようとも、それらを等しく説明する複数の、しかも互いに両立不可能な理論が存在しうる」という「経験理論の決定不全性（underdetermination）」の問題との関連が読み取れる。そこで論点は、経験的なデータ（脳に関する神経生理学的データも含めて）に関して等値な複数の理論の間の優劣はどのようにして決定されるのかということである。そしてその優劣の決定は、チョムスキーも指摘しているように、理論そのものが有する特徴、例えば、〈鮮やかさ〉、〈単純性〉、〈操作しやすさ〉、．．．等々に依存していると言える。

すなわち、《我々》の「最良の理論」は、経験的データとの一致を踏まえた上で、理論的特徴において最も卓越している《我々》によって評価されるという点で最も良い理論だということになる。<sup>16</sup>

要するに、経験科学としての言語理論が言語使用者による規則遵守の事実を説明するという営みは、《我々》という視点を前提しているのである。それは、「規則に従っている」という事実は《我々》という観点に基づいているということを示している。

## 六 結論

チョムスキーによれば、孤独な言語行為者クルーソーの言語は、「共同体」的要素を含まない言語という意味での「私的言語」である。しかし、何よりも、クルーソーは何らかの言語規則に従っていると想定すること自体が、《我々》という視点に基づいていた。「規則に従っている」と《我々》が承認できる事態こそが、「規則に従っている」という事態であり、《我々》にとって実際に実行可能な規則遵守の行為がまさに、規則遵守の行為である。この意味で、チョムスキーが想定するクルーソーの言語はいわゆる「私的言語」ではない。さらに、チョムスキーは、言語理論の研究対象は言語行為者についての事実であるという点を強調していた。だがその事実は、クルーソーの人において何らかの意味で純粹に成立しているような事実ではありえない。チョムスキー言語理論の経験科学的性格を検討した結果は、言語行為者の規則遵守の事実は《我々》という視点を媒介にした言語事実であるということであった。したがって、クリプキの共同体説に対するチョムスキーの批判は成功していないのであり、共同体説に対するアンチテーゼとしてチョムスキーが掲げる個人主義的言語観は支持できない——これが私の結論である。

クリプキの共同体説についてはさらに論じるべきことが残されているが、言語の現象と《我々》とどう言葉の結びつきが本論から見て取ることができたのである。<sup>(17)</sup>

## 【注】

- (1) 個人主義的言語観を擁護する議論として次の著書を参照のしよう。Colin McGinn, *Wittgenstein on Meaning* (basil Blackwell), 1984.
- (2) Saul A. Kripke, *Wittgenstein on Rules and Private Language* (Harvard University Press), 1982.
- (3) A. J. Ayer, "Can There Be a Private Language?" in Stuart Shanker ed., *LUDWIG WITTTGENSTEIN Critical Assessments* (Croom Helm), 1986 (*Proceedings of the Aristotelian Society, Supplement*, vol. 28, 1954), 243.
- (4) Kripke, *op. cit.*, p. 89. 引用文中の傍点のあるものは、原文ではイタリックで書かれている。
- (5) *Ibid.* Cf. *ibid.*, p. 96.
- (6) *Ibid.*, p. 110. 引用文中の「」は引用者の補足である。
- (7) A・ナルソーから言語を取り上げるところを継続するのは、Peter Winch, *THE IDEA OF A SOCIAL SCIENCE and its Relation to Philosophy* (Routledge), 1990 (first published 1958 by Routledge & Kegan Paul), pp. 24-39; Norman Malcolm, *WITTTGENSTEIN: NOTHING IS HIDDEN* (Basil Blackwell), 1986, pp. 170-178 節である。  
註として、本論文は別日付執筆中の論文を参照のしよう。
- (8) Noam Chomsky, *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use* (Praeger), 1986, pp. 230-236.
- (9) *Ibid.*, pp. 235, 240.
- (10) Cf. Kripke, *op. cit.*, pp. 7-54.
- (11) *Ibid.*, pp. 37-40.
- (12) Chomsky, *op. cit.*, pp. 236-243.

- (13) *Ibid.*, pp. 249-260.
- (14) Cf. Willard Van Orman Quine, *Word and Object* (MIT Press), 1960, sect. 6.
- (15) Chomsky, *op. cit.*, p. 250.
- (16) 「経験」ということに関してすでに、何を経験的データとみなすかという点に、我々が採用している理論があらかじめ関与しているという「観察の理論負荷性」の問題がある。
- (17) 言語の個人主義的解釈を支持する別の議論もある。また、「共同体」に関してその上何が言えるのか、あるいは何が言えないのかという問題がある。さらに、本論で到達した観点からすると、本論第二章で引用した前の二つの記述をどう処理すべきかという問題もある。これらについての詳細は、現在執筆中の論文で述べられている。

(大学院後期課程終了)